近世説美少年錄 四編 三

へ13
3567
18

門へ13
號 3567
卷 18

東京帝國大學圖書館藏書
昭和 34.6.3 受

新局玉石童子訓巻之二上冊　東都　曲亭主人口授編次

第二十二回　穴隙を鑽て二賊夜師徒を脅ま　生口と呈して両少年疑獄を解く

再説大江杜四郎成勝。峯張柒六郎通能ハ料らずも柿八ゞ話説の事ゝ便宜とゝなりけれバ。先住吉の故老們ハ這義を告てあらるゝさきそ。明日ハ大和へ起行ぜんとそ。是日黄昏の比及ぶ。主僕編笠を戴て。俱ハ孟林寺と立ぶらふ。折ゝ六月中旬ゝ。昼ハ酷暑ハ堪がたけれども。夜ハ涼しく反て路天よく晴て月清く。隈なき景ハ送らる。路の去向の草蒸濕。冷てハ虎ハ貌る馬追ハそぐ繁昌虫鳴く音ハ人の跫響ハ一雲妻時絶ても堪ぐ憂ハ浮世の哀愛苦労早稲の垂穂並も短夜の深ハ程中とハそゞけり。然れハ又ハ宵孟林寺の住持木丟ハ大江峯張両少年ゝ主僕の任

吉へとて出ずくもきてよる必ず人からぎーとかう来るべーと思ひ〜かば枕僕柿八ふ吩咐て既ふ前門ハ鎖せども角門ハ閉ゑるのこと也丹を打せぬ他名ゐかへり来て敲ゑるを疾開て入れよとられ〜かば柿八則ちゐ已ゞ小子舎の窓推開ゑて軟退火ゑ月を燭ふ明日起ゐの用意ふ脚絆雨衣合ゐ領ふゑ辛の紋縫ひ草鞋の緒を融〜ゐど考て睡らで両個の少年を俟ふ短夜ゐれい更闌て既ふ亥中ふゐるゐれと他名ハいまゞかへり来ぬいふくと思ふのこと果敢ゐく打胞を催〜て寐とも知らぬ在り〜一程子二刻時候ふゐるゐ〜べ〜折ゐる人の礫々と角門を敲く音き柿八伯耳ふらゐ〜て是必青年達のかへり来ふけりと思ひ〜ゐ一聲高く應と答て遽〜く身を起ゐて板金剛を揚りゐて足ふ曳穿外ふ出て刀袷们還りゐひ〜狭と問て躰く角門の掛鎖をやをゐ外〜て開くを遅〜と外面ゐり突然と找を入る者あり四郎兼六主僕ふあらぞ小阜の像ゑ両個の氈毬児身の材五尺八九寸涅染ゐる廣袖の單衣を裙短ふ被做〜ゐる圓括の帯尻高ふ紈結び〜那腰ふ銅鞭巻ゐる山刀の二尺七八寸許ゐを瑞下〜ふ挿做て重裡ゐる草鞋を紐短ふ穿〜ゐける面魂の鬼魅ゑふ蜘蛛ゑ思ふ圓ゐふ眼赤金對の威勢當ゐべくもあらねば柿八を吐嗟とゑかりふ叫んとまゐふ聲立ぜ逃んとせ〜を一個の強盗走蒐ゐ項髪を掻抓み揉仆ゐ背を踏へて動せぬ這奴倘聲を立ゐべ只一刺ふ息の音留んと見哩と引抜く刃の光ふ眼を射ゐ〜柿八を更ふ生ゐる心地せぬ許ゐへとふ聲も脱歯ふ漏て粥ゐ〜ゑを然もこをあらゐと蹴返せば一個の強盗立替り〜て起んと蠢く柿八を起〜て果ぜ両ゐを捉て腰ゐる麻索掖出〜く最も緊〜く結扭け〜當下又一個の強盗柿八ふゐ向ひ〜やをれ老老児命惜くハ住持の臥房へ案内をせよ然ゐを今ゐら頭を掉ゐば其首即坐ふ斃ゐ落さん蚯蚓立ねと推立ゐれば柿八を事の勢ひ従ハざるとゐぞ阿容々々と先ふ立て引く住持の便室ふ至ゐふ件の両個の強盗ハ

角門を開いて柿八二賊
お綱らを

引提一刃と鞘ふ斂めて。含笑ふ〻〻迹ふ跟間に二間の坐席を過て燈火見ゆる
垂蝿の臥房の邊へ近つく程ふ所化子舎ふ臥こりける。両個の沙弥ハ驚に覚て。
来ぬるハ誰そと問せも果ず一個の強盗刀を拔て。蝿の吊緒を斫隳せば。ふく嗅
ぐ両個の沙弥ハ。盗見入りぬと。稍知りそ。逃躯れまく欲ども。蝿ふ那身を
包まれて。網羅の鶉ふ異ならぬ。術も夏野の草枕夢ふ覚れとそ念ドたる程も
あらせず。強盗ハ甲乙俱ふ膂力ふ任せて。沙弥ハ〻と惨刹蹂躙れば。憐むべ〻両
個の沙弥ハ叫んとするふ息絶て死活ハ知らぬ。做りふけり。ふ程ふ木玄道徳ハ四郎
茶六がかゝるを。侯て睡りも沒ぬ。在りけるふ小夜深る隨ふ堪がたき蚊のまければ。蝿帳ふ
入りて。躯く枕ふ就ふ自心ふ懸れば宿も寝られぬ。既ゆて肉又ハ〻。東て子の時ふ
んと思ふ比盗見や入りしけん。平ならぬ物の响。所化子舎ふ〻〻かば。驚ぬる
ぬ敢噪ぬ。躯て悄地ふ蝿帳を出て。吊緒を解ふ灯燈の燈心を増掻起て。

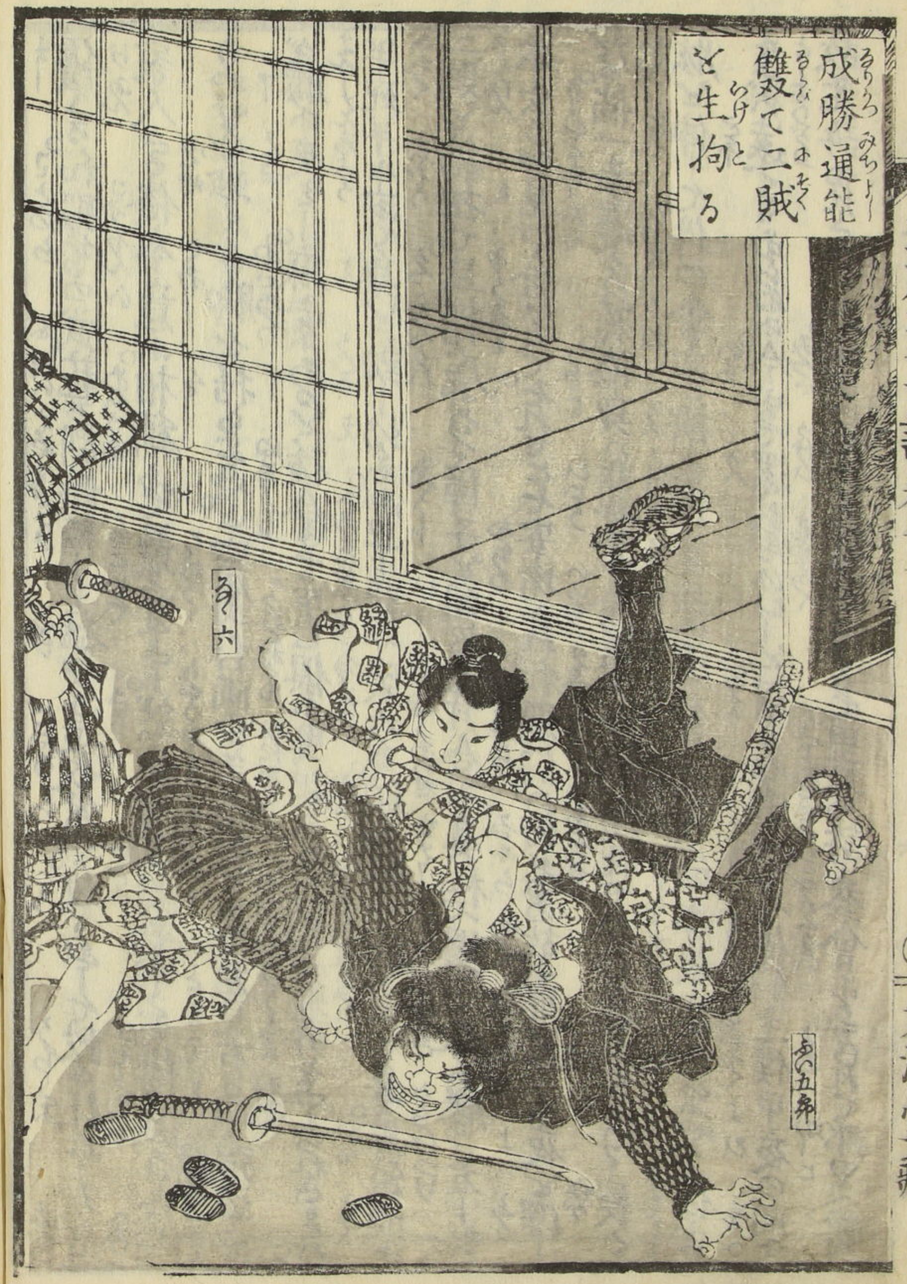
蒲團ふ近接遣る。跂坐して。徐ふ數珠ふ繰て。念佛ぬて在りけふ程ふ既ふ
あく。両個の強盗ハ。足音高く找て近つく。住持の臥房ハ思ふも似ぬ一個の法
師。怕ぬ色なく。端然として在りければ。駭る蒐らんハ。さまでふそ。俱ふ刃を引提て。金
剛神の星荼たる像ふ。雙ぬ〻〻疾視ふ。有ぬ程ふ大江峯張。両少主僕ハ
甲夜ふ住吉の里ふ造りそ。故老ぬの宿所を訪ふ。他ハ里長許赴ぬて。ぬ〻〻還
らぬ。と。ぬ〻〻只得還ぬ。と。侯程ふ憶ふ。ぬ〻〻似ぬ小夜深て。遂ふ夏中の時候ふ
及び。其人かゝる事ふ。ぬ〻〻則事の便宜を生て。云云と相譚ふ。夏の夜ぬれば短そ。
子の時近くるゝ。〻〻遽〻く辭〻去りぬ。明日ハ早天ふ大和路へ起ぬの准備ハ。
たれども。這頭ふ小衣を深ぬ。鈍ぬ〻〻かぬ。と共侶ふ呟ぬ。路次をのぬて。子二刻
ぬらん。と思ふ時候。俱ふ孟林寺へかゝる。と。見れば。角門ハ開ぬてあり。真夜半ぬる。
亦れぬる。欲柿八ぬ歳老かゝる。最烏滸。と思ふの。鎖せぬれば。敲ふ及ぶ。主

僕らそゝく内ふ入るふ庖湯の戸も亦開けてあれば俱ふ驚ろき訝り怪ぶ儘ふ我と入るふ庖湯中房所化子舎まで燈火滅て黒白と分ぎ只奥のかゝふ丁りて耳熟れ人の聲音を罵るごとく呼えべらく訝る四郎柔六原来強盗入りこうけん師父の上心許ず惴りて行恐ぬるぬるぬるぬると咽泣ち咽れて共侶ふ袴の裾を結を單衣の袖巻返して刀の瑳甘る准備も俱ふ精悍く熟て間茶迷ふとるく窃歩ゝ二間の坐席を過て声まる奥のかゝ住持の便室ふ近ぶけり是より先ふ両個の強盗ハ住持木丟ふうち向ひてそれ坊主落着貌まる今戦國の習俗を弱ハ強ふ征せられ小ハ大ふ併らるふの義ふ拠て俺們も人を屠アて東西と畧る山豪栄曜ふ誇りしも一向ハ造化ゆくて獲ハあらぬ銭遇たまべ今宵和尚ふ借んと思ふて白刃で推参まる人銭まれ金まれある歟ら出て夙くらるさぞやと両聲尖く責嚇ま木丟怕る氣色ゆく念珠を止めて答る

やう和郎答る偶ま被れども开ハ見る所の錯ふる當寺ハ素より寒院ゆく檀越坊料多ハらぬ況今戦世の在俗ハ残忍不仁るらぬハ稀ま塔を供養し法師ふ布施まる善男善女ふとるる何ぞの餘財ありて和主ふ取んやとのらせも果ま甲乙両個の強盗ハ又聲苛立て喧ぶる老狸奴ぶ縦横よく瞞るとも昨日も今日も俺們ぶ昼悄地ふ来て覘知る本堂の光景阿弥陀の俗客殿の席薦障子まで多の届ぶる造作結構敗鋏経紀ふ見せられとも銭ふ寺と誰らふべぶ詩も語も入らぬ疾身を起して財庫へ案内をせよ开を猶惑ふて不の字とらぬ這巨刀を引導渡さんふぞやくと双と席薦へ衝立徳立俱ふ睨へ嗜れども木丟噪ぶ推禁めて小架棚より金を出ま加衣袖衣の鎖と開ぶて圓金五両と捞出ま又強盗ふ向ひて和郎答ふうち向ひて謎るとも是より外ふ金子ハらず是のて恵れと投與る強盗ハとも見ぬ怒きる両聲又震

立く這奴究て胆大し。強情張て時と稼して天を明さまく欲するとも。虚々とすく其
徹と喫んや。今ハしも饒しがさるゝ。觀念せよと左右齊一刀を見舞と震怒る。那
時遲し。這時速し。背後ゆ魄ゆ両少年。四郎柒六両聲ゆ盗見なと喚禁るに。
驚て見ゆゝ両個の強盗敵ゆい數ゆも足らぬ少年なると侮りて誘鳥の兎と鶩
る像く。蚓く蝗く蹠を旋して撃んと競ふを四郎柒六相迎て物ともせず引外ゆて共
倡ゆ。拔合しる刀の電光丁々拓地と殺締ぶ修煉の刀尖梳とゝく。爰より蒐る勢
ひゆ強盗ゆハ胆落て受刀ゆのみ徹りしかば甲乙ともゆ淺痍と負ふて流る舞血ゆ大刀
筋乱れて竟ゆ怯へ引外て逃んとすると毫も透さず大喝一聲。両少年が武勇の
對の剽姚ゆ二賊ハ刃と撃ゆ落されて怯むを込うと主僕のる徹俱ゆ刀の背撃ゆ
窮所と撲地と撃しかば二賊ハ苦と叫ぶも果ぞ身と轉して仆れけり。當下水ゆ道
德ハ憶ぎヤヤと声を被て扇子と開ゆて両少年をうち扇ゆて誉て曰ゆ思ゆ

優しる。和殿ゆの武藝剽姚然しも猛かる這奴ゆと殺さぎして撃仆ゆ出
家人しる俺本意ゆ相稱ゆて最愛す。然とも由断ぎべるぞ陽滅ゆが逃
りやせん蝗くゆ脚を括らぎやと。心屬れが両少年ハ応と考て左見右見て。強盗毎
ゆ腰ゆ夾しし麻索あると拔合して甲乙俱ゆ曳起ゆ二賊ハ窮所と中られくまば
半死半生ゆて身と動しかぞ當下四郎柒六ゆ。躰て件の麻索とゆて思ゆの隨ゆ
二賊と結扭て且檐廊ゆ障子と開ゆて背合ゆ真柱へ圍々巻ゆ縢著しかば
木乗ゆ見ゆ合笑て。それでとて安堵ゆれ和殿們ハ何ゆの故ゆ那里ゆ小夜と深し
なる。倘一歩遲ゆせば俺身ハ非業ゆ命と果さん好造化であるけるよとゆ長く
肱と伸して件の金子と掬合て又架裟笈へ藏れば四郎柒六ゆ合て曰ゆ住吉
ゆでハ遠くもあらぬゆ今ゆ遣らぎ。訴りのゆハ理りと俺們主僕甲夜の間ゆ
故老許ゆ。ゆ水田の樋と修復ゆよりて里長許参會ゆ召れて那里へ


成勝通能
雙て二賊
を生拘る
ゑ六
ゑ五郎

ゑ四郎
ゑけん

たりとのみ只得屋主人の還るを俟と二時有餘是名の故ふ小夜深て所用と果
ち稍方僅かに来れば不慮の賊難師父ふ傷損のありしは是切てもの幸なり。
所化達も柿八もいふ做りけん心許なし。なまじ知らせぬるをやと問へば本玄然べとよ。他
们ガ上ハ酒家も沼知らぬ。疾紙燭して見ゆるをやとのみ楽六ならず蠟燭ふ火点
移りて燭を秉て先ふ立ば杜四郎も共侶ふ刀を引提て出て見る。次の間なる壁際ふ
結扭て俯ーたる者あり是則柿八と火光を見て頭を抬げ。腋児よ咱名を殺ひ
ぬべと叫へば四郎楽六ならず燭を抗て得と見て安斬や是も強盗の所為なるべ。と慰
め。躯く其索を解捨れば柿八も先腕を麻り腰を敲き膝折布て却強盗ふ
結扭れて只得室内ふ立られて這一室まで来る程ふ果ハ蹴られ仆たけふ首
尾を報ーかば。木玄も是を少て。倶ふ所化子舎ふ到て見るふ両個の沙弥も死ふ至
らぬ。御尚ふ他名ハ強盗。蜘の吊緒と研落されて剰酷く蹴れば一旦氣絶ス

たれども。倶ふ窮所ふあらざれば姑且ーて息出く。那身ふ巻ふけれども又只物のおそろ
しさふ出るやらぬ存りとのみ事の趣を出ーかば果ハ四郎も楽六も住持も絶ち腹を
抱て。倶ふ金甲共を欠ひげる。小程ふ柿八も密ふ茶倉柴折焼て茶を煮て四郎楽
六と木玄ふ夜饌を薦めるぬ。左右する程ふ暁天ふ做りー比件の両個の強盗ハ
やうやくふ息出く。氣力ハ我ふ復ーかぬ。刀瘡痛て堪ぬられば。倶ふ頭を低て存り
當下峯張楽六ならぬ見て呵々と冷笑て虎狼も檻ふ入りて六人ふ命を乞ぬる者
ぞ。やれ強盗毎其身ふ做りーハ積悪の報ならんを思ひ知るや。姓名出処支黒
まで招了ーて死ふ就ぬとのみれて両個の強盗ハ頭を抬げ眼を睜りて這頑童奴ら
何をのふや。咱名ハ名もある山豪ならねど運盡て乳の臭失ざる若们ふ戰ひ負て恁
摘ふ做りたりとも。招了ぬ口いるのぬ。烏滸をるひとと罵れば楽六怒て扇
子を合て撻懲さんとて身を起ぬ。杜四郎推禁めて。徐ふ二賊ふ向ひて礼正く

さて論じやう。今戰囲の習俗を武士なる者も糧竭れば駒馬前脚を啗ふ例ある者
あり。和郎等も亦其儔なべし。去れども法度を犯して惡を做す者を律令の
定む所刑殺に処するとなれば。ものを天も明ば囲の守の廳へ牽て。これも這道場
より罪人を出すべし。豈是出家の本意ならんや。實ふ已むを得ざるの事。非如和主等
免れがたくて頭を法度ふ喪ふとも我们必師父ふ請て其名迹を吊ひ給はせ。姓名
出処を具ふ告ふとなんで木去も俱ふ伝やう。四郎の理言俺意ふ稱へ慈悲阿弥
陀の本願なるふ幸ふして東西を畧られず俺さへ沙弥さへ一人として傷損なる者も
るとなりけれども。盡ふ和郎等を饒して放遣まく欲けれども。ふ其這義を守ふ許ぶ
後難も亦料りがたし。俺自由なる所法度ふ憑ぶ。その故ふ是なる少年の
大江杜四郎成勝がいつる如く。和郎等免れがたくて。死刑ふ其身を終るとあらば。俺戒名を
授け。墓碑を建て。永久菩提を修ーなさせん。其名を問へ這所以なりと論せば峯

張楽六も悟りて膝を打鳴らしく。尓也々々。俺愆ちぬ威をのて携問せまく
ありしへ倒ふ益なりし山の刀称達腹を立て慚愧々々と慰まべ両個の強盜ち
笑く。尓いかるまべ出ざらんや。先這案を緩めべよとふ楽六心ゆく卷くる案を解
復しく。両人を饒さを推居まべ一個の強盜陳じていはく。現ふ強弓も其強斬る
時ふ最小の鏃も刺ずとなり。俺心を和る両少年の文武才幹和尚の慈愛を
つくるべし。俺们も亦人なり既ふ論を美ぬまべ今ならずいつ已んや。咱等両個ハ
世ふ知られる鐵屑鍛冶郎が支黨なり。俺ハ則低杭駝鳥太又是なるる。俚毛
吹五郎と喚做されて去歳より頭領鐵屑ふ相従ふく周防なる。山口鶴峯ふ
城下ふ在り。又煉金の騙りく人を揣らまく欲ーふ其事風く發覚れて討
隊の士卒向ハーる。一要時ハ防ぐ戰ふのから。終ゆる大刀折ま勢力竭て頭
領鐵屑ハ搦捕られ俺们両個ハ虎口を脱まく。便船を以く浪速ふ向つ。

歌店を求めく潜びく居すことの久しく吹五郎其語と續紀く。然い又俺頭領の情熟の土産ふ今様と喚做まあり。他人ふ知らまさる。乳守る浮世袋屋の名妓あてありけふ過世ありてや鐵屑と相伸ーよりこの年末暢路の數累く相愛まほの魚水の如く死をのく誓ふ妹伏ふあるまじ鐵屑遂やを秘密と告く。那煉金の術と做まふ他を媒鳥ふ使ふのあり。其折ふ浮世袋屋の主人ふ三又く閨房金を取らせく。他ゞ両個の小二板まく。或ハ三月小半年。相携く他郷ふ遊時今様を小槌と喚做ー又那両個の小二板を丁児打出と唱做ふ言。然れば去歳の九月ふ頭領西へ赴く折今様を別まを惜ふく。幾日も放難たりーと。俺们屢是を諫めく。竟ふ袂を分ちあれとりくば駝鳥太又ふ。然べ又咱ち両個ゞ周防より脱ま来く。潜びく浪速ふ居程ふ坐して咲へば箱も空ーく。盤纏既ふ竭ーかぞいくゞ那今様ふ此の錢を借んと思ひて豫相識る君ゑまとゞ。往る五月のムの宵ふ咱ち浮世袋屋へ赴く。初會の客家面色ふ。當晩今様ふ逢ふ工を泣く。小夜深け人定りく却周防まくありー事。鐵屑搦捕らまーかゞ。竟ふ死刑ふ處せらべ那折俺身ゑ。吹五郎と。俱ふ這地ふ来ゑりと送もなく呼き告く。路費の資助を乞求るふ今様ゑ安も泣果ゞ流ふ涙ゑ泉の如く。終夜泣明ふーかゞ。俺も困ーて睡ることを泣ゞ。其明旦別まふ臨ふく。今様涙を止めく。心ふ懸ませのふ路費の多ふ。ろろく。仕まとも。日今ゑ整ぶく。後ふ必使をのく。御歌店へ齎ーてんとふふ咱ち歌び来て。俺隠處と坊名と。屋主の名を呼き告く。後便を契ーふ果ーて其日の曛昏ふ今様ゑ約束違へゞ。一個の密使をのく。贈来ーけふ消息あり。其書甫ふ斂めく。圓金十枚と一撮の。雲鬢裁

裏添くゝありしーつぞ。則是を受合りく然氣もなく使ゑを返しつ。其後宿の閑室わく。吹五郎と共俱ふ其消息を聞きるふ。其文其書れ美しげゝく。俺们ゝ知所あらねと。寫連ゝ事の趣を哀しかるぞとゝかとなく。鍛冶主世を去りぬひるぞ。誰を所依ふ苦海の湍ふ猶立くあぐらん。有斯る浮世ふをみ染のあまふるべたよりもなく果敢あかりけふ一葉の船の。漕焦くて死あんのを單殘てく世ふ在らぞ竟わる那秘事を人ふ知らまく俺身をら。召捕らるゝあらぞ恩あらく怨るぞ。親方まぞも連累の罪免まがさくやあらむぞらん。袷とらひ恰とひ。既ふ覚期を極め侍。聊なぐら御約束の茶蘼花十枚まあら。紀念料とも見ぬひ絲又去の黒髪ハ奴ゲ髻結の梢ふ侍らぬで紀の高野の御山へ斂めぬぐ後の世ふ苦を免るくよりもやあらん憑ふ

まあらをまあひ去のゆのこ。あるかしこ。とありしかぞ。閑紀く悔しぬ鬼百合を。露の涙ふ堪ぞりしと。巻復しく二ぐびハ見ぞ。只其金子を有負人と。做しそのく潛びく居ぞ。とゝなぞ吹五郎語を次さ去ふ其夜の夕ふ。件の小槌の今樣ぞ。泊双して亡ぬと。人の噂ふ聞かぞ驚紀もあつ不便ぞとも。那身既ふ在らぞ做ぞ。俺们両個を鐵屑ぞ支黨ぞりと知者ぞく。人の口より洩ぞこあらじと思ハば倒ふ憚ぞ後安くて日を弥る程ふ那十金も房賃と酒肉賭博ふ使果しく。せん術のぞ隨ふ濃癖發らぞふをぞ。這孟林寺ハ先住より。倹約をのく宗とぞぞ錢ありと人の噂ふ聞知ぞく。熟しく今宵の暴挿ぎ事十二分ぞりけぶ。造化精妙と思ふ去ふ鈍や和郎ぞふ雌伏せらまく。復生べくも思ハねぐ今を去の世の迭

裏ふ有ー実事を吐盡ーく。和郎爲ふ爲ふ後ゝ はくの。夜話種ふ做せるのゝ是ゝ満腹ゝ さらんと。と言辯ふ誘る互人も慈悲と礼儀ふ勝ゝも ゝき招ゝ備ゝりけるに四郎柒六の欽びいはらん木丟も言意表ふ出ゝ。一要時嗟嘆の聲を絞てむ。ゝ果ゝ二賊ふ向ひて。ゝゝが如ゝ那今樣ゝ。鍛冶郎を互人と。知ゝて俱ふ相愛ーて他ゝ哄騙の蝶鳥ふさへ做りゝ其悪を幇助ーハ是情慾の惑ひゝ。竟ふゝゝ刃ふ伏ゝーハ他天四刄の免ゝ所憎むべく憐むべ。遊莫人の懺悔ゝ。五逆十悪も滅るゝ。然ば汝ゝの菩提ハさらゝ。他ゝ剪ーゝ頭髪の梢も俺必廻向ーて。蓮華王院へ斂てん其黒髪いふゝゝ。と問ゝ駝鳥太答ゝふゝ。開ゝ辱く兼りゝ今樣ゝ贈ゝーゝ金子ゝゝ使ひ果ーたゝ。其書殼と黒髪と。焼却んゝ

さゝゝゝ。今も俺懐ゝ。勒肚ふ藏めゝ在り。疑ーくハ食ひーく。見ゝ。ゝゝ書簡と。ゝゝ。駝鳥太の懐へゝを指入ゝく搔拶ゝふ。果ーゝ勒肚ありけれ。締を解ゝ曳出ーく。見ゝゝ書簡と黒髪あり。倶ふ其書簡を讀見ゝふ。今這二賊の所。詭譎ゝらぬを知ゝふ足ゝ。既ふ明證と。ゝくけゝ。意外の怡悦ふ勝ゝりけゝ四郎ハ二賊ふうち向ひゝ。汝ゝ。懺悔のゝゝりゝ。其ふ所照据あり。汝両個ゝ身を殺ーく。罪ゝ。男女四名ゝゝ死を免ゝ由ゝゝ。其積悪ハ憎むべく。言の懺悔ハ賞ゝべ。ゝゝもゝゝん今樣ゝ。自殺の夜女人初會の客ゝふ大和の旅客朱之丞と喚做ゝ壯佼ゝ。分説建ゝ禁獄ゝーゝ。剃髮屑鍛冶郎の支黨ゝべ。と疑ゝふ。這故ふ朱之丞を宿ゝふ。十

三屋九四郎の逆旅の留守を為し。渾家と両個の乾児さへ連累せら
れたく。今も猶囚牢ふ在り。とハいへど米六も俱ふ牢ふ。其九四郎ハ俺兄
なり。いまだ安藝より還られざる。嫂乾児の寃屈の罪と。救ふ由なく一
日も安心のなりしふ。時ふ我料らずも。汝若両個の照児を引く
けふ。日屬念ずる神明佛陀の靈應利益あらむもらん。陣
館へ牽て折。言を違へず招ずるや。とらまくく駝鳥太吹五郎ハ面と
注ー嘆息しく。其解屍人の事ハ。風聲ふよりも受ざふ事なり。
然ーも寃屈の分説達さず。皆其首を喪ず。是俺们が身代ゆく。
いとく後安ふ為べー。と思ふハ虚負ゆく。反く咱ら其男女を救ふ
奇貨ふせらふる。造化の小児の所行なる歟天の網ふそ漏がされ不
思議〳〵々々。とざりふ。呆まく又ふようもなー。當下峯張米六ら今

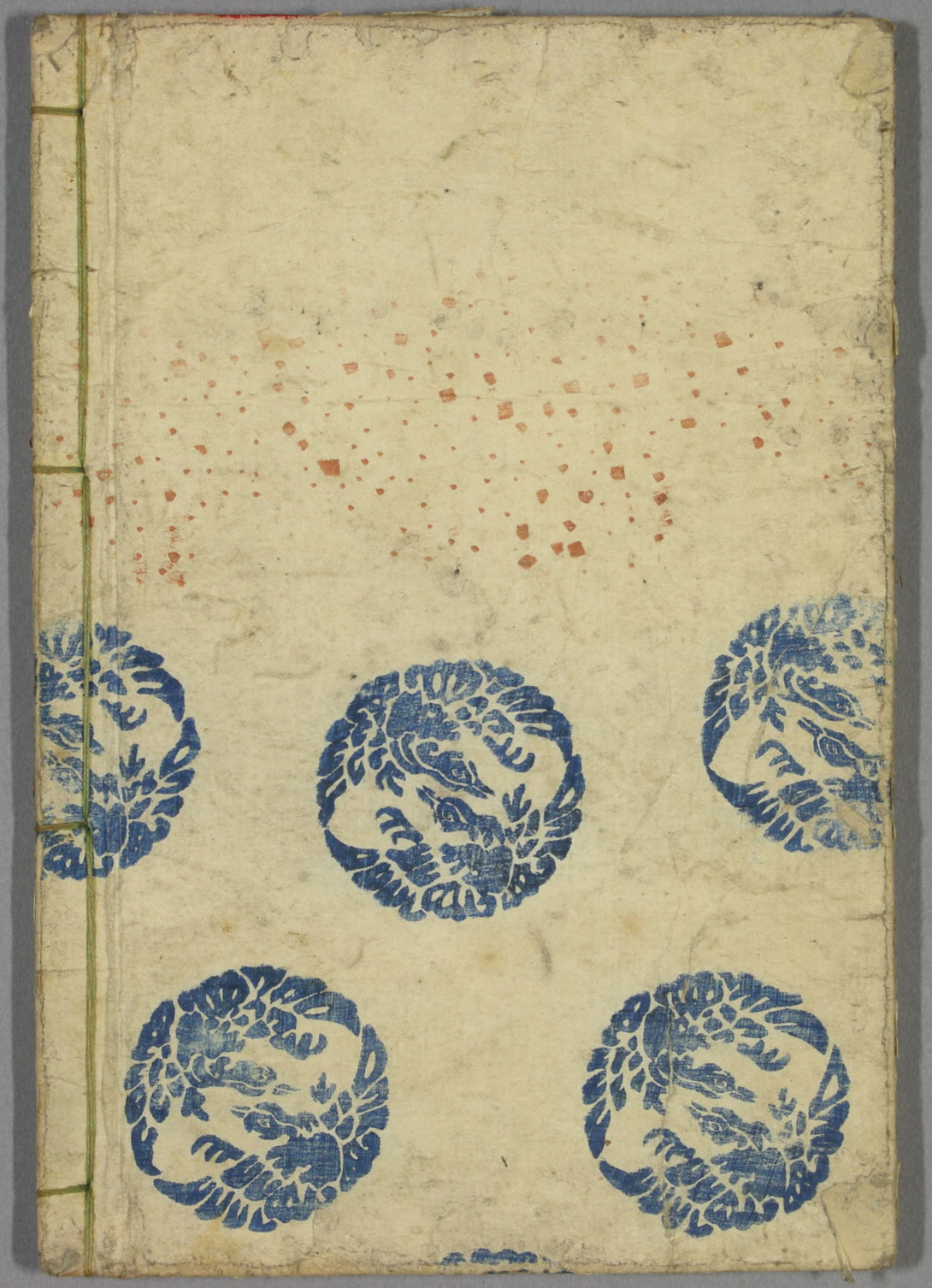
様の書簡と黒髪を。分らそ鼻紙ふ推裹く。却木丟ふ呈覧ふれい。
木丟則其黒髪を受含りく。書簡をバ米六ふかへーけり。左右まる程ふ
茂林を離る鴉の聲しそ。天ハ夙く明ーかど。杜四郎も米六も。乙藝ふと
救ひ合るべき照据の二賊を獲てけまバ。今ハら大和へ起行ふ及ず先住
吉ふ里長故老ふ這義を告く。出訴の准備をいそぐんと。俱ふ
庵淵へ退けば既ゆく柿八ふ。早飯を炊ふ果て。先這両個の少年ふ
薦めく出ー遣く。早飯果て米六ら。住吉へ赴ら杜四郎ハ又
駝鳥太吹五郎ゞ招ずの條々を告文ふ寫さんとく。料紙硯を携て
畢所化子舎ふ在り。又住持木玉ら。柿八ふ吩咐く。大紀やらふ為握
飯ふ。焼塩を塗らしく。鄉りー儘る。駝鳥太と吹五郎ふ喫せるゞ。
ちも亦出家の慈悲ふ為べー。尓程ふ。六の日已の比及ふ峯張米六郎通

能ハ。住吉の里長故老と。十二屋の近隣なる。里人櫛工們を招て孟林寺ゐかへり来ゐければ。木丞則召入れて。杜四郎と倶ゐ對面を。登時里長故老等ハ四郎米六の武勇大功を相祝し。且乙藝なるを救ふべく告愬の一義を商量し〻。陣舘へ訟人へ。則峯張米六と。住持木丞の名代ゆへ木訥と喚做し〻。沙弥一名参るべし。と定まけり。杜四郎を名家の子孫れば。功を秘し〻。這隊ゐ入らまく欲せざ。されども陣舘の門前まで。倶ゐ出くべしとく身装を。這小松村ハ。住吉の枝邨なるまで。那里の差配ゐ由らざるとを。這故ゐ村正を置き。只孟林寺の門前なる。貧民八九名詣来く伴ゐ立んとゐ。高量既ゐ果れども。生口の二賊駑鳥太吹五郎を。倶ゐ脚ゐ刀瘡あまたゐ。曳立きとゐいふせん歩より紛ぐもあるべきを。他等ハ恥く徒ゐ棄く。貧民們ゐ帰せけり。恁而大家孟林寺を立出く。酷暑を忍び〻いそぎしかど既ゐ未の時候ゐ至り〻。杜四郎ハ里人櫛工等と倶ゐ其門前ゐ集合く居を。當下峯張米六を孟林寺の沙弥木訥。并ゐ住吉の里長故老等と倶ゐ告文を捧げ徇下ゐ参りて。住吉ゐ櫛賈十三屋九四郎の弟峯張米六等同宿し〻小松の孟林寺ゐ在り。昨宵件の寺ゐ推入り〻ゐ。両個の強盗ハ鐵屑鍛冶郎ゑ残黨ゆく。低抗駝鳥太狸毛吹五郎と喚做き者をりしを。搦捕りく火を。牽りく参上ゐ。と宣え上く。則告文一通と。照据の書簡を呈閲ゐしかど。家臣熹嶋皆人頻紀其二書を受含りて。生口の二賊と米六里長等を。聽の局の内へ召入れく。伏兵四五名をりく守らせけり。尓程ゐ三好木工頭職善ゑ。量裏ゐ林ゐ獄ゐ

たりけり。大和の旅客朱之介及連坐の罪人九四郎が妻乙藝乾児六市四摠等の疑獄の虚実を定難く。屢朱之介等と囚牢より牽出させて。拷問の咎と繁しく責めとゞも。朱之介等は素より知らぬとゝ皆只寛屈を叫ぶのみ。俱ふ羮伏せざりしかゞ職善は少く思惑ひて。竟ふ本月の初旬ふ至りて。両個の間諜児をかく。大和と上市へ遣しん。朱之介は那郷なる。落葉が女婿狡非耶。且他ら年来ふ彷彿と。落葉が心術の好丑と那里人ふ因りて拷らせしふ其間諜児かへり来て。少なる隨ふ告しかゞ朱之介が上市あて放蕩無頼の事の趣。且他を前ゆも罪ありて國の守ふ召捕まして落葉が救ひし事の顛末。且這春ふ至りて。落葉を朱之介の為ふ沙金と唐布を買せんとて。他ふ金子を多く齎しして京へ遣しうと

ふ其崖畧を知らまゝかゞ職善疑ひ半分解て。肚裏ふ思ふ。然らば那百九十餘金を。落葉とやらんが朱之介ふ東西と買せん為なるとゝ。是不良の財ふあらず。遽莫朱之介ふ今様と殺しる。罪を償ふ所なし。矧又舌命の鐵屑が。支黨ならぬとふ照据なるけまべ其罪の。輕重なるゝ定むべくもゝ但九四郎の還るを俟て。敲かゞ知るべしと。更ふ尋思をまくりしかゞ是より呵責の杖を禁めて。朱之介を牽出させゞ。就中乙藝なるを。獄卒毎ふ勦らせて。摸稜の段ふ效ふのゝ其次の日。船積城藏を召よせふ。城藏を是より先ふ屢陣館へ召さまゝかゞ。猶疾病ふ推托けて在りしふ今を辭ふ詞なく。躯七と俱ふ参りしかゞ。職善則朱之介が所をりて。他と舊縁の虚実を問ふ城

藏を連累の罪を怕れて具ふ答へを。但云。曩ゆも鼠七が稟上し如く。那朱之伙を。當春賣買の事ゆより。賤父荷三太の店舗ゆ来り。折々入船を俟よりあり。姑且止宿者ゆ。其折まぐ小人を。他と相識ゆいを。況小人の兄桟太郎の妻黄金と。舊縁あるべくもいつを。黄金の故郷い近江ゆ。荷三太が親族の獨女ぐいひ〻を。迎合りく。新婦ゆ。いふ〻朱之伙と。舊縁のゆえ。皆是他が陳ぜ所。佯誑ゆとそいひあ。と辯ゆ儒しく稟あり。職善ゆ〻點頭なく。さそあらんさそあらん。曩ゆ鼠七が答稟ゆと相同し。然てを伙ゆを所要るし。重れ〻参るゆ及ぎとく。鼠七と共伯ゆ。身の暇を取せけり。低而三三日を経ぬ程ゆ。是日孟林寺ゆ同宿の一少年。峯張柒六郎通能と喚做を者。昨宵鐵

屑鍛冶郎が支黨ゆ。二賊と搦獲しとく。孟林寺の沙弥住吉の里長と俱ゆ。件の二賊を奉りて来く。訴ゆ〻ぐ。職善則有司従〻。正聽ゆ着坐ゆる程ゆ。惠嶋頼紀美やく。先伙兵をのて。罪人未朱之伙とて藝六市四揔を。囚牢より召出させて。並く局の内ゆ在り。頼紀則孟林寺の住持水玉と。峯張柒六郎ゆ連署の告訴状をとり用ゆて。聲朗ゆ讀む。一遍職善是を聞果る時。頼紀又今様ゆ。迷墨へと。一通と呈見を。職善みづから是を讀見て。先住吉の里長を。檐廊の下ゆ召よせて。問ふ。今告愬状ゆ由るゆ。武功の少年峯張柒六ゆ。十二屋九四郎の弟ゆ。莫俺いまぐ九四郎ゆ弟ゆ。と聞知を。あらぐ何どて始より。ゆえ上ざるか。と詰りけり。因く里長答るよりあり。這段い尚長安ゆ。又去の次の回ゆあり。

新局玉石童子訓卷之二上冊終